様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０８６１

研究課題名（和文）東南アジアにおける出土銭貨の考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological Research of Unearthed Coins in Southeastern Asia

研究代表者
三宅　俊彦（Miyake, Toshihiko）

淑徳大学・人文学部・教授

研究者番号：９０４２４３２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、東南アジアの中世から近世にかけての銭貨流通を解明するための考古学研究である。3年間にわたり、インドネシアおよびラオスにて出土銭調査を実施した。その結果、インドネシアの東部ジャワでは13世紀以降中国の銭貨が大量に流入したことが明らかとなった。またラオスでも17世紀以降に方孔円銭が一定程度流入していたことを突き止めた。これらは東南アジアにおける銭貨流通の様相を解明する上で重要な成果と位置づけられる。

研究成果の概要（英文）：This is an archeological study which sheds light upon the circulation of coins in Southeast Asia from the middle ages to early modern times. For a period of three years, research of excavated coins was carried out in Indonesia and Laos. Results showed that from the 13th century onwards, large numbers of coins flowed into Java, in east Indonesia, from China. It was also determined that from the 17th century onwards, round coins with square holes circulated to a certain extent in Laos too. These can be seen as important results in clarifying aspects of coin circulation in Southeast Asia.

研究分野：考古学

キーワード：考古学　東南アジア　出土銭貨　中近世

１．研究開始当初の背景

出土銭貨の考古学的研究は、国内でも1990 年代以降に本格的に研究が開始された、新しい研究分野に属する。特に鈴木公雄による一連の研究（『出土銭貨の研究』東京大学出版会 1999 他）や、出土銭貨研究会の機関誌『出土銭貨』の発行などにより研究が進展した。さらに櫻木晋一が『貨幣考古学序説』(慶應義塾大学出版会 2009）を著し、考古学の一分野として「貨幣考古学」が確立されつつある。

しかし東南アジアでの出土銭の考古学研究は、まだ緒に就いたばかりである。これまで筆者らは中国や北アジアにおいて調査を進め、データの蓄積を進めてきた。次に注目されるのは、東南アジアである。ベトナム、インドネシアをはじめとする東南アジア諸国では、13 世紀以降に中国の銭貨が大量に流通する。ベトナムなどでは自国でも銅銭を鋳造しており、東南アジアにおける銭貨流通の調査は、考古学的に重要な研究課題である。

当時流通していた銭貨の実態を解明するためには、一括出土銭の調査が重要である。一括出土銭は、一時期に大量の銭貨を地中に埋めたもので、その時に流通していた銭貨の種類や鋳造場所が把握でき、さらに各種枚数の比率（銭種組成）などを知ることができるからである。

それらを中国や北アジア、東南アジアなど、各地の事例を集成して比較することで、各地域の特徴や共通点を抽出することが出来、当時の銭貨流通の具体的な様相を解明することが可能となる。

２．研究の目的

本研究の目的は、東南アジアにおける出土銭の実態を把握し、日本の中世・近世にあたる時期の銭貨流通の様相を復元することである。

この時期の東南アジアでは、中国の銭貨を主体とした銅銭が大量に流通していた。それらは地中に埋められた一括出土銭などの考古資料として発見されており、考古資料からのアプローチが有効である。

東南アジアにおける一括出土銭の調査は、すでに筆者を中心とする研究グループが、ベトナム北部とインドネシアにて開始している。ベトナム北部では 2006～2009 年に 7 回の調査を行い 6 点の一括出土銭を整理した。インドネシアでは 2011 年にジャワ島とバリ島で出土銭の調査を行った。

これらの研究成果を踏まえ、本研究ではインドネシアとラオスでの調査を行うこととした。インドネシアではジャワ島の一括出土銭の調査により、銭貨の導入時期の様相を明らかにすることを目的とする。またラオスでは、東南アジア内陸部での、銭貨流通状況の解明が目的となる。

３．研究の方法

当該研究は、これまで研究が進んでおらず、新しい研究分野である。そのため調査成果は、ほぼ新知見となる。銭貨は地域をまたいで流通するため、広い地域を網羅した研究が必要であり、本研究はその嚆矢と位置づけられる。

しかし調査手法は、考古資料の基礎データづくりであり、もっとも基本的な作業である。そのため大がかりな器材などを用いずとも、一定の成果が期待できる。

具体的な作業としては、一括出土銭の銭貨の種類と枚数を把握し、集計表を作成することが最重要の作業となる。分類のためには、資料に付着した銹などを落とすクリーニング作業を行う。さらに資料の基礎的なデータを入手するため、個別の重さ、大きさを計測し、集計表を作成する。さらに状態の良いものを選んで、拓本や写真撮影を行い、調査報告を作成するための資料化も合わせて行う。

４．研究成果

（1）インドネシア

①調査経過

2013 年 1 月に東部ジャワ文化財管理事務所に収蔵されている 2 点の一括出土銭を調査した。両者ともジャワ東部のマラン県の山中で発見されたものであり、すべて中国銭で、北宋の銭貨が主体となっていた。銭種と数量を集計し、種類ごとに拓本と写真撮影を行って資料化した。

②調査成果

プジョン（Pujon）出土銭

総計 4,933 枚である。中国の新、唐、前蜀、南唐、北宋、南宋、金の銭貨が確認された。最古銭は新・貨泉、最新銭は南宋・咸淳元寶であった。北宋銭がもっとも多く 4,297 枚で、約 87%を占める。次いで唐の 506 枚の約 10%、南宋の 102 枚の約 2%の順である。

ンガバブ（Ngabab）出土銭

1,036 枚確認されており、一括出土銭と考えられる。中国の唐、南唐、北宋、南宋、金、元、明の銭貨が含まれている。最古銭は唐・開元通寶、最新銭は明・永楽通寶である。北宋銭がもっとも多く 735 枚で、約 70%を占める。次いで明の 150 枚（洪武通寶 78 枚、永楽通寶 72 枚）の約 15%、唐の 111 枚（開元通寶 105 枚、乾元重寶 6 枚）の約 10%の順である。

③所見

この 2 点の資料とも一括出土銭であり、当時流通していた銭貨を埋めたものと考えられる。銭貨はみな中国銭であり、当時流通していた銅銭は中国よりもたらされたとみて良い。しかし、これらの銭貨を見ると大型銭（大銭）がプジョンの事例で 4 枚あるだけであり、ほとんどが一文銭で占められていることが分かる。中国の一括出土銭の事例では、14～16%程度大銭が含まれていると見られ（三宅俊彦 2014「ベトナム北部の銭貨流通」『ユーラシアの考古学』六一書房）、これらの資料では大銭が排除されていたことを示している。

これは日本やベトナムの一括出土銭の事例と共通する特徴である。13～15 世紀の日本やベトナムでは、中国からのいわゆる「渡来銭」が、流通銭貨として貨幣経済を担っていた。そして両国とも大銭が排除され、1 文銭のみが流通していたことが分かっている（三宅 2014 前掲）。このジャワ島東部の事例も、日本、ベトナムと同様の理由で、大銭が排除されたものを考えられよう。

また流通していた銭貨の種類はベトナム・日本と共通している。各国の銭種組成を比較すると、中国、日本、ベトナムではかなり似通った組成を示す。これは 1 文銭であれば銭貨の種類は問わず、中国からそのまま国外へ持ち出され、流通していたことをしめしており、インドネシアでも同様であることが確認できる（図 1）。

この結果から、インドネシアでも 1 文銭は選択されることなくそのまま受容されたことが分かり、中国銭貨を東アジア各地が受容する際には共通の傾向があることが明らかとなった。

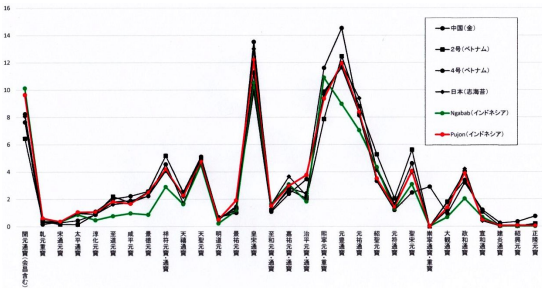

図 1　東アジア各地の銭種組成の比較

（2）ラオス

①調査経過

2014 年 2 月と 2015 年 2 月に、ラオスにて出土銭の調査を行った。調査はルアンパバーン県とシェンクワン県にて出土銭貨の調査を行った。特にシェンクワン県クゥン郡イェン村のヴァットバンイェン寺院で発

見された 51 枚の銭貨について調査し、それぞれ計測、拓本、写真撮影など基礎的な資料化を行った。

②調査成果

銭貨の状態はあまり良くない。銭銘が読み取れたのは45枚で、不明は6枚であった。種類は中国とベトナムの銭貨であった。中国銭は 25 枚あり、北宋銭 14 枚、南宋銭 1 枚、清銭 7 枚、三藩の乱の銭貨が 3 枚であった。ベトナム銭は 20 枚あり、すべて景興年間（1740-1786 年）に鋳造された銭貨であった。最古銭は中国・北宋の天聖元寳（1023 年初鋳）、最新銭はベトナム・黎朝の景興銭（1740 年初鋳）である。

③所見

まずこれら銭貨の流入ルートであるが、清の銭貨は 1 枚を除き、すべて雲南で鋳造されたものであった。また三藩の乱の銭貨も雲南で勢力を得た呉三桂などが発行したものである。これは我々がハノイで調査した清銭の状況と類似している（『ベトナム北部の一括出土銭の調査研究』昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12,2008）。これにベトナムの景興通寳が約半数を占めている状況を考えると、これらの銭貨はベトナム北部で流通していたものが、シェンクワン県にもたらされたと考えられる。

また銭貨が埋められた時期は、最新銭が景興通寳（1740 年初鋳）であることから 18 世紀半ば以降と推測される。また嘉慶通寳（1796 年初鋳）が見られない点は、19 世紀に入る前に埋められた可能性が高い。

また、シェンクワン県の県都での骨董市場調査では、方孔円銭が多数存在していることを確認した。その中で、日本で鋳造された長崎貿易銭の元豊通寳を発見したことは注目されよう。長崎貿易銭は 1659 年から 1685 年まで長崎の中島銭座にて、中国や東南アジアに向けた輸出を目的として鋳造されたものである。我々の調査ではこれまで中国、ベトナム、インドネシアでの出土例を確認しており、ベトナム北部から流入したものと考えられる（図 2）。

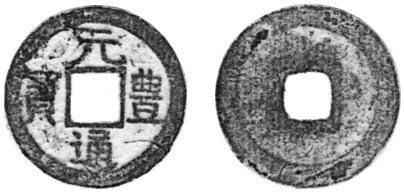

図 2　ラオス発見の長崎貿易銭

本科研の調査成果により、東南アジアの銭貨流通の状況が明確になりつつある。今後も調査を継続し、東アジアにおける銭貨流通の様相の解明を目指したい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　1 件）

①Shunji Ouchi, Shinichi Sakuraki, Adrian Popescu, Yuriko Abe, Vietnamese Coins in the Fitswilliam Museum, Cambridge (Ⅱ), 下関市立大学論集、第 57 巻第 1 号、2013、p.73-98

〔学会発表〕（計　3 件）

①三宅俊彦、東ユーラシアの出土銭、環東アジア研究センター学術講演会、2013 年 3 月 28 日、新潟大学

②菊池誠一、櫻木晋一、三宅俊彦、角南聡一郎、阿部百里子、坂井隆、東アジア・東南アジアにおける一括出土銭の最新研究、日本考古学協会、2013 年 5 月 26 日、駒澤大学

③三宅俊彦、東亜出土銭幣的考古研究、日本学者従出土文物研究中国的経済和軍事（招待講演）、2015 年 3 月 10 日、香港中文大学

〔その他〕

新聞報道（計　1 件）

①ジャワ島から中国銭貨、2013 年 3 月 27 日、読売新聞（朝刊）

６．研究組織

(1)研究代表者

三宅　俊彦（Miyake Toshihiko）

淑徳大学・人文学部・教授

研究者番号：９０４２４３２４

(2)研究分担者

なし　　（　　）

(3)連携研究者

菊池　誠一（Kikuchi Seiichi）

昭和女子大学・生活機構研究科・教授

研究者番号：４０３２７９５３

櫻木　晋一（Sakuraki Shinichi）

下関市立大学・経済学部・教授

研究者番号：００２５９６８１